

### Ⅲ カタクチイワシに関するシンポジウム

共催 水産海洋研究会  
静岡県水産試験場

日時 昭和44年1月27日 13時—18時

場所 静岡県新居町水産会館

コンピナー 服部茂昌 (東海区水産研究所)

#### 話題および話題提供者

- 1 静岡県沿岸におけるカタクチイワシシラスの漁況と海況  
小長谷 輝 夫 (静岡県水産試験場)
- 2 カタクチイワシ・シラス漁場を中心とする環境について  
上 原 進 (東海区水産研究所)
- 3 昭和42年駿河湾・遠州灘に起つたタイワンアキノコ出現の概報 高温年に発生した異常生物現象例  
中井甚二郎・平尾利嗣・工藤盛徳 (東海大学海洋学部)
- 4 カタクチイワシシラスの漁況予報  
近 藤 恵 一 (東海区水産研究所)
- 5 総合討論

#### 1 静岡県沿岸におけるカタクチイワシシラスの漁況と海況

小長谷 輝 夫 (静岡県水産試験場)

カタクチイワシシラスの主漁場は遠州灘、駿河湾西部の主要な河川の流入する沿岸域に形成され、主としてシラス船びき網によつて漁獲されている。

静岡県のシラス漁獲量は1953~1959年までは7000~11,200トンを示しているが、1961年~1963年には5000トン台に減少、その後1964年以降豊漁が続き、1968年には12,000トン陸揚げしている。

シラス漁期は3月から始まり12月におよんでいるが、漁獲量のピークは5月に最も多く、例年5月を中心にして4~6月に年間漁獲量の50~70%を占めている。

遠州灘沖冷水塊とシラス漁獲量との関係、とくに静岡県沿岸に集合する春季発生群と冷水塊の出現・消滅に伴う黒潮流路との関連について述べたい。

1954~1968年の15年間の黒潮流路を遠州灘沖の冷水塊の存在期間中の蛇行型および冷水塊の存在しない期間中の直線型に分け、その変換期をみると近年では1956年の前期(1

～3月)に蛇行型から直線型に、1959年中期(6月頃)に直線型から蛇行型に、1963年中期(7～8月)に蛇行型から直線型にそれぞれ変換している。また短期間ではあるが1965年6月、1966年2月にも直線型から蛇行型に変換している。

これら黒潮のパターンと対応月のシラス漁獲量の関係を検討した。1956年前期(1～3月)蛇行型から直線型に変換した年の年間漁獲量は11,198トン、春期(4～6月)の漁獲量は7,890トンを示している。1956年は冷水塊の消滅年であり変換期はシラス主漁期前にみられ、4月以降黒潮は接岸している。

1959年中期(6月)に直線型より蛇行型への変換期については、変換は6月に行なわれ、この年の漁獲量は9,340トン、4～6月の漁獲量は6,932トンを示し、1956年同様豊漁年である。

1959年は、シラス漁獲量のピークである5月が変動期以前のための豊漁であつたと考えられ、6月遠州灘沖に冷水塊の停滞とともに、本県沖合の黒潮流路の変動が激しく、遠州灘・駿河湾のシラス漁は減少して、駿河湾では105トン、遠州灘では200トンの水揚げしかなく、それぞれ例年の $\frac{1}{4}$ 、 $\frac{1}{2}$ に減少している。

1960～1962年(蛇行期)の4～6月のシラス漁獲量は、3,500～4,800トンを示し、例年を下廻り、特に1960年は、1957年に次ぐ凶漁であつた。

1963年中期(7～8月)は、蛇行型から直線型に変換した年であり、主漁期に冷水塊が存在して黒潮のパターンも蛇行型であつた。春期の漁獲量は少なく例年の70%水揚げしたにすぎない。

その後長期的な変動はないが、1965年6月に2年ぶりに冷水塊が発生した。この年は4月に入つても例年に比べて低温に経過し前年に比べて $2^{\circ}\sim 3^{\circ}$ 低目であつた。

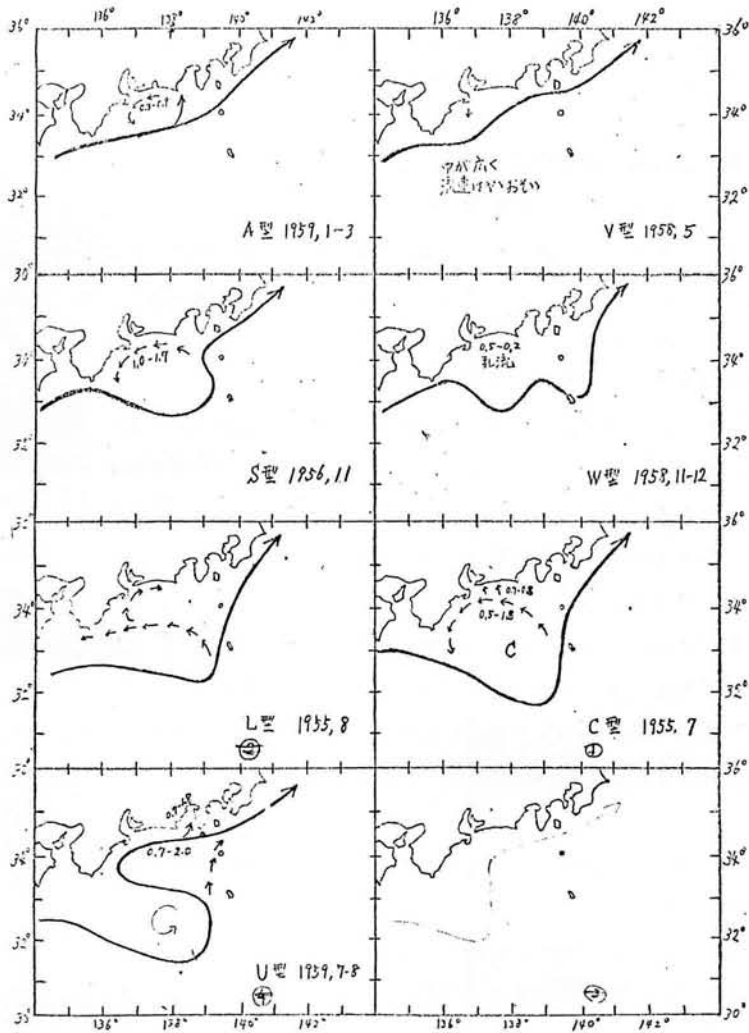
5月におけるC. P. U. E.をみると、湾内安倍川・大井川河口ではそれぞれ314キロ、1,380キロ、遠州灘では549キロであつたが、蛇行型になると、C. P. U. E.の減少が目立ち、駿河湾内安倍川・大井川河口では、それぞれ136キロ、378キロ、遠州灘では88キロと激減している。また1966年と同様シラス主漁期中に冷水塊が存在した年であり(6月には消滅した)。4～6月の漁獲量は例年の66%を示し、C. P. U. E.も少ない。

以上冷水塊を伴う蛇行型(S. U. C型など 第1図参照)がシラスの主漁期(4～6月)にあたる時期は漁獲量が少ないが、しかし蛇行型でも安定期に入れば、激変期より漁況がよい傾向にあり、また分岐流が県下沿岸域に向つている時もやゝ好転している。

冷水塊が出現しない直線型(A型など)については出現月の約80%が豊漁である。

黒潮流路の変動期(蛇行型→直線型または直線型→蛇行型)の前後にシラス漁の豊漁がみられ、1952年・1956年・1959年・1964年には、それぞれ11,900トン・11,200トン・9,300トン・11,800トンを漁獲している。

駿河湾および遠州灘沿岸の春季発生群は、黒潮流路の変動がシラス漁況を大きく左右するものと思われるが、しかしシラス漁況の変動は、その他多くの環境要因をあわせ考える必要がある。



第1図 黒潮流路の型(静岡水試・県漁連1964 技術普及資料1にもとづく)

## 2 カタクチイワシ・シラス漁場を中心とする環境について

上原 進(東海区水産研究所)

薩南沿岸で産卵されたカタクチイワシ卵が黒潮に搬ばれ、その途中で順次本州太平洋沿岸に補給されていくと言われる。この意味で、日本南岸全般の黒潮の動向は、その年のある場所(沿岸域)の資源量を与える上から、また資源の再生産機構を与える上からみても、きわめて重要と云える。しかし、問題を遠州灘に限って考える場合、補給を考慮した遠州灘の地域的海洋特性と同時に卵の生育に関係する海況とはどのようなものかといった点を考えてみる必要がある。こゝで